

特集 コロナ後の社会

次の三つの文章を読んで、後の質問について考えてみましょう。

新しい生活様式は、私たちの感性を変え、日々の行動パターンも変えていくでしょう。らせん階段を上るようにして、私たちは色んな角度から新たな景色を迎えるはず。社会の変化をくみ取り、新たなビジネスを世界に打ち出すチャンスかもしれません。若い人にはアイデアがあるし、わたくしの知る限り、もう考え始めている人もいます。

ソーシャル・ディスタンスは、今はまだ物理的な距離として考えられていますが、社会の中の自分自身の位置づけを知る、自分の居場所から他者との関係を見つめ直すことだと捉えています。一人ひとりの資質、意欲によって、自律的に能力を発揮できる社会をいかに整備できるか、そこが問われています。女性の活躍の場を広げる、様々なセクシュアリティのあり方を認め合う、今後も増える予想される外国人と共存していくなど、課題は山積しているように見えますが、一方でこの間に味わった経験の中には、大きなチャンスが芽を出そうとしているように思います。

それぞれが、その人に合った適切なソーシャル・ディスタンスを保持しつつ、他者の喜びや痛みをフェイクではなく確かな事実として理解するような連帯感に溢れた社会、そういう未来を是非迎えたいものです。

ロバート キャンベル 「ウィズ」から捉える世界
村上一郎 編 「コロナ後の世界を生きる——私たちの提言」 岩波新書

コロナ後の社会が、情報技術（IT）を主体にした社会へと転換するのは間違いない。しかし情報技術はあくまで道具であって、目的ではない。それをどのように使うかが、私たち一人ひとりが考えるべき問題として残る。

その時に大切なことは、明日への「希望」だと思う。

20年以上も前に、アフリカでエイズ対策をしていた。現在のような治療薬はなく、予防が唯一私たちにできる対策だった。村から村へと回り、感染予防の重要性を説く。しかし、それがなかなか上手くいかない。ある日、一人の青年がつぶやく。「10年後は、エイズじゃなくても飢餓とか暴力とか、戦争で亡くなっている。いま、エイズ予防をする意味はあるのか？」

対策がうまくいかなかったのは、彼／彼女らの理解が足りなかったわけでも、私たちの説明が悪かったわけでもなかった。ただ、彼／彼女らが、10年後の自分を想像できなかったからだった。社会がどうあるか、どう変わっていくか、どういう希望のもとにあるべきか、というのは、一人ひとりの心のなかにしかない。それが合わさって、未来への希望につながる。言葉を換えて言えば、選択可能な未来は私たちのなかにしかないということかもしれない。

山本太郎 「疫病と人類 新しい感染症の時代をどう生きるか」 朝日新書

気候変動、資源枯渇、不平等は、私たち人類が直面している大いなる危機なのである——コロナ禍ではない。

しかしながら、これらの大いなる危機ではなく、コロナ禍が私たちの注目と関心を集めている。人類史上初めて、地球規模の解決法が求められる地球規模の危機に直面していることを、世界中のだれもがはっきりと理解しているからだ。日本を含め世界のどの国も、単独ではコロナ禍を解決できない。日本が国内で感染者をゼロにしたとしても、モンゴルやソマリアや世界中のどこかでウイルスが生きつづけたとしたら、また日本国内で感染者が出るのは時間の問題だ。全世界の国々が安全にならなければ、新型コロナウイルスに対して安全な国は存在し得ない。

（中略）

もし地球規模のウイルスの脅威に人々が協力して打ち勝つことができれば、そこから得た教訓を一般化し、気候変動などの地球規模の脅威に協力して対応できるようになるかもしれない。日本国内で新型コロナウイルスを撲滅してもコロナ禍が解決しないのと同様、日本上空の大気中の二酸化炭素濃度を下げても気候変動から日本を守ることはできない。大気中の二酸化炭素は、新型コロナウイルスのように全世界に素早く広がるからだ。

これは非情な現実だ。だが日本は世界に対し、新型コロナウイルスだけではなく、世界中の気候変動や資源枯渇や不平等を解決する努力をすることによって、自ら範を示すことができる。そしてこれは、世界にとっても、日本にとっても良いことだ。なぜなら日本もどの国も、安全と繁栄を享受するためには他に道はないからだ。この現状認識をコロナ禍が私たちにもたらしてくれたとしたら、このウイルスがもたらした悲劇は、人類が世界を救う一助となったと言えるだろう。

ジャレド・ダイヤモンド（小川敏子、川上純子 訳）『危機と人類』日経BP

後世の人々は、新型コロナウイルスによるパンデミックをどのように捉えるのでしょうか。

人類は、過去にも繰り返したパンデミックを経験し、パンデミック後に大きな社会変革の時期を迎えています。例えば、14世紀のヨーロッパを襲ったペストは、当時のヨーロッパの総人口の四分の一から三分の一にも及び人々の命を奪い、後に、ヨーロッパにおける封建制の崩壊や、ルネサンスにつながったと言われています。また、約100年前に、いわゆる「スペイン風邪」と呼ばれるパンデミックを起こしたインフルエンザウイルスは、全世界で最大1億人とも推定される人々の命を奪い、第一次世界大戦の終結を早めたとも、ヨーロッパからアメリカに覇権が移るきっかけになったとも言われています。

上の文章はいずれも、新型コロナウイルスによるパンデミックが終息した後の社会、いわゆる「アフター・コロナ」「ポスト・コロナ」を見据えて書かれた文章です。未来について確定的なことは言えませんが、こうあってほしいと「望む」ことはできます。あなたはどのような社会を望みますか。